

2026年2月22日 第二礼拝

説教題 『ほんとうのよろこび』使徒19章11～20節

主任牧師 加藤 誠

「神は、パウロの手を通して目覚ましい奇跡を行われた。」(使徒言行録19章11節)

先週の水曜日 18 日から教会の暦で「受難節」(レント)に入りました。イースターまでの約六週間、十字架への道を選び取り、永遠の命に至る道を私たちに開いてくださった主イエスの深い祈りに心寄せて歩むことができますようにと願います。

さて、今朝の聖書は使徒言行録 19 章、パウロのエフェソ伝道の一場面です。「祈祷師」という仕事でもうけていた人たちがパウロの行う目覚ましい奇跡に驚き、自分もやってみたいと思い、試しにパウロの真似をして「イエスの名によってお前たちに命じる」と言ったところ、悪霊たちにとびかかれてさんざんな目に遭った。それを見た人たちが恐れを抱き、主イエスの御名を信じる人が大勢出て、自分たちの悪行をはっきり告白したというお話です。18 節の「悪行」とは「魔術」のことで、魔術に魅力を感じてきた人たちが魔術の書物をもってきて皆の前で焼き捨てる、その値段は銀貨五万枚にもなったというのです。いったい今朝のこの個所は何を私たちに問いかけているのか。「魔術」とはどういうもので、それに対する「パウロの信仰」はどういうものかについて、聴き取っていきたいと思います。

まず「魔術」ですが、現代で有名なのは「ハリー・ポッター」でしょう。呪文を習得して超自然・超人間的な力を「操る技術」。それが「魔術」です。今朝の個所も祈祷師たちはパウロが唱える言葉を呪文と理解し、その呪文を習得することで人を癒す力を操れると考えたわけです。ここに聖書の信仰と魔術の違いが浮かびあがります。聖書の信仰において、癒しを行うのは「神」です。ですから 11 節の主語も「神」。神が善しとされればパウロは癒すことができるけれど、神が善しとされないならパウロは何もできない。神が「主」でパウロは「従」。パウロはその神の御心と御業に「仕える者」です。それに対して魔術の場合、「主」は祈祷師です。その祈祷師の思いは「自分が魔術という力を操れるようになって名声を得、金を儲けること」。どこまでも「自分本位、自己本位」です。そこには、祈祷師といいながら、神への恐れ、神の前に自分を低くする信仰は見えません。興味深いことに町の人々はこの祈祷師たちのような魔術を自分も習得して力を得たいと思い、銀貨五万枚(=現在の価値で五億円)もの魔術の本が人々の間でよく読まれていたというのです。このことでふと思ったのが本屋さんに並んでいる自己啓発の本です。自分を高めることは大切なことでしょう。しかしその時に肝要なことは「何のために自分を高めるのか、その目的」ではないでしょうか。祈祷師たちが魔術を求めたように、「自分本位、自己本位」のまま自己啓発していく。もっ

と強い自分、もっと力を操れる自分。その「もっと、もっと」の先に何があるのでしょうか。欲深いわたし、人の成功をねたみ、自分が賞賛されることに心地よさを覚えているようなわたしが「自分本位、自己本位」のまま「魔術」を手にしたら、この世界は大変なことになります。魔術は人の心を変える魔力を持っています。はじめのうちは善意に生きていた人も、魔術を手にして自分の思いのままに操る力を手に入れると、その心に悪意が膨れ上がり、やがてはその人を悪意の塊に変えてしまうことがなんと多いことでしょうか。力を得ると人は自分が神になってしまうからです。欲深く、心狭く、愛に乏しい人間が神になって力をふるう世界は地獄です。

それに対して聖書は、私たちが「自分本位、自己本位」から解放される救いを示します。パウロは「いつまでも残るものは信仰と希望と愛、この三つである。その中で最も多いなるものは愛である」（I コリ 13：13）と語りました。この世界を創り、わたしに命を与えてくださっている神の御心とつながる（信仰）。その神がこの世界に希望されていることを自分も望み見いていく（希望）。その神の愛をお互いの間で分かち合っていく（愛）。つまり、わたしの命の源である神につながられ、神の希望と神の愛を生きたる所にこそ、いつまでも残る価値がある。この信仰と希望と愛を私たちに教えるために生き、その中で最も大いなる愛を十字架で示されたイエス・キリストの救いを、パウロは宣べ伝えました。私たちが「自分本位、自己本位」の歩みから方向転換させられて、愛の神につながられ、神のビジョンと一緒に祈り、神の愛が分かち合われていくために力を尽くす者に変えられていく。そこにほんとうのよろこびと幸いがあるのではないのでしょうか。

今朝の巻頭言では、若松英輔さんの言葉を紹介させていただきました。「よろこび」にはいろいろありますが、「ほんとうのよろこび」とは何かを、私たちは知っているのでしょうか。知らなければ、探し出すこともできません。「ほんとうのよろこび」は「悲しみの底でも感じられるものはずだ」という若松さんの言葉にわたしは同意します。この世界で不条理な苦難、悲しみ、痛みの中にある一人一人に、その「ほんとうのよろこび」を届けるために主イエスは生きられ、十字架の道を最後まで歩み通されました。また E・フロムのシャバット（安息日）に関する文章は示唆的です。私たちは何のために毎週日曜日に主日礼拝をささげるのでしょうか。自分のためではなく、大いなるものに自分をささげることを学ぶため。「何かを持つ」ためではなく「何も持たない者」であるかのように生きることを学ぶため。そして私たちに与えられている本質的な力、祈ること、学ぶこと、食べること、飲むこと、歌うこと、愛の行為を行うことを学ぶための安息日なのだ…とフロムは語ります。主の日は、私たちが「自分本位、自己本位」から解放されて、神のもとにある「ほんとうのよろこび」を生きていくための、喜びの日なのです。この主の日を大切に受けていきましょう。